

---

# セカンドライフは異世界で【改訂版】

もりこ。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セカンドライフは異世界で【改訂版】

### 【Nコード】

N3922S

### 【作者名】

もりこ。

### 【あらすじ】

主人公を夢見た凡庸な少年は非日常へと脚を踏み入れた。

誰よりも才能に溢れた少年は非日常へと脚を踏み入れた。

確かな愛を胸に秘めた少女は非日常へと脚を踏み入れた。

ご近所さん達の冒険譚、開幕。

この作品は「セカンドライフは異世界で」の設定を元に新たに書き起こした作品です。前作とは異なる設定が出る可能性が多々ありますので御了承下さい。

## プロローグ（前書き）

お待たせしました。改定前と比べて序盤はシリアス多めですので御了承下さい！

## プロローグ

人は誰でも夢を見る。

ああなりたいと。こうありたいと。こんな筈ではなかったと。いつかこうなる筈だと。

夢には2種類ある。

叶える事の出来る夢（目標）と叶う事が決していない夢（絵空事）。

夢（目標）を持つものはそれを叶える為に尽力すれば良い。

なら。

夢（絵空事）を抱いてしまった者は一体どうすれば良いのだろうか？

4

昼休みの始まるを告げるチャイムが鳴った。

「さて、帰ろう」

私は鞆に荷物を詰め込み、帰り支度を素早く済ませる　　ちなみに  
今日は6限まで授業があるのだけれど、  
私にはそんな事情は関係無い。

「…また早退するの？」

後ろの席から掛けられた声に振り返ると、クラス委員で同じ部活の  
たかどう あかり  
高堂朱里が恐る恐る、と言った風に首を傾げていた。

「ああ、毎度毎度悪いけれど、担任には臍臓が死ぬ程痛いから帰ったと言っておいてくれ」

じゃあ、と言って私は席を立ち、教室を出た。高堂以外のクラスの連中はそんな私を冷やかな眼で見ている。まあ、だからと言って何なんだと言っ話なんだけれど。

「何でなの…？」

教室から今にも泣き出しそうな啜きが聞こえた様な気もしたけれど、私は振り返らずに学校を後にした。

学校を早退した私は繁華街の外れにある、廃ビルの屋上に居た。

落下防止用のフェンスは朽ち果てていて、容易にフェンスの向かい側に行く事が出来る。

「此処から飛び降りたら…」

まあ、十中八九死ぬだろう。別に私は自殺志願者ではない。ただ、此処から飛び降り、死の危険に触れる事によって私に秘められていた力が覚醒すれば良い、と思っているだけである。

「無い。絶対に、無い」

100回生まれ変わって100回飛び降りたって結末は変わらない。  
此処から40メートル下で凄惨な死体が出来上がるだけだ。

私に秘められた力があれば良い、だなんて夢はただの絵空事でしかない。現実逃避とも言える。

それでも…それでも私はそんな絵空事を捨てきれず、相も変わらずこんな所で落ちこぼれているのだ。

「……家に、帰ろう」

春先とはいえ、流石に外は冷える。そう思って落下防止用のフェンスの内側に戻った直後だった。

「あん？」

ブレザーをだらしなく着た煙草臭い連中がそろそろと入ってきた。  
人数は4…いや、5人か。

恐らく此処は不良達の溜まり場だったのだろう。不良達は揃いも揃って好戦的な表情を浮かべていた。

無言で不良達の間をすり抜けようとしたが、やはり阻まれた。

「お前、何してんの？」

不良達のリーダー格らしき男が問い掛けてきたので、私は何とかこの場を上手く切り抜ける為に言葉を発しようとしたが、それよりも速く、薄汚いスニーカーの爪先が私の鳩尾に突き刺さった。

「あ、が…っ!？」

「問答無用だっつーの、ボケが」

堪らず膝を着いた私の髪を乱暴に掴んで持ち上げたリーダー格は煙草によつて黄ばんでしまった歯を剥き出しにして笑った。

「取り敢えず出すもん出して…それからはお楽しみの手サンドバックタイムだぜ？」

リーダー格の言葉に、周りの不良達が下品な笑い声を上げた　屑め。

其処からは地獄の様な時間だった。

何回殴られただろうか。何回蹴られただろうか。もう何もかもが曖昧だった。

「あー…飽きちまつたし、そろそろ帰つか？」

「んだな」

「取り敢えず、こいつの財布で昼飯でも行こーぜ？」

「そりゃいいなあ！」

漸く解放されたと思い、私は地面に横たわりつつも視線だけを不良達の背中に向ける。さっさと帰れ。

「　何とか間に合ったみたいだな」

不良達の誰とも違う声が耳に届いた。

「ああん？何だてめ」

リーダー格が何か言い掛けた瞬間、リーダー格の身体が思いつきり吹き飛んだ。そして私の身体にぶつかり、私は潰れたカエルの様な声を上げてしまった。

「ああ、悪いな！見えてなかったわ」

まるで悪びれた様子の無い声に、苛立ちを込めて視線を向ける。その先には自信に満ち溢れた瞳が爛々と輝いていた。何だ、こいつは。

男の身長は170センチとすこし位で、見覚えのあるブレザー姿だった。確かあの制服は県下でも有数の名門校のものだった筈だ。おまけに超が付くほどのイケメンだった。きつとリア充に違いない。死ねば良いのに。

「悪いけど、依頼があつたんでお前ら全員ぶっ飛ばすわ」

おまけにこのイケメンは喧嘩もすこぶる強く、瞬く間に残りの不良達を片付けていく。

「まるで物語の主人公、だな…」

何故だろうか、助けてもらっている筈なのに返って気分が悪い。

「てめーかぁ！ コイツ呼んだのはぁ！？」

私のすぐ横で倒れていたリーダー格が唾を飛ばしながら叫び、私の胸ぐらを掴んで持ち上げ、落下防止用のフェンスに叩き付けた。

私は目の前の男よりも背中越しに伝わるフェンスが千切れる感触で気が気では無かった。

「こらこら、何やってんだお前は」

「あが!？」

リーダー格の男の頭頂部に踵が叩き付けられ、リーダー格は力無く崩れ落ち 此方に倒れ込んできた。

そして遂に、強度の限界を迎えたフェンスが外側に向けて倒れた。リーダー格は辛うじてビルの縁に引っ掛かって事なきを得ていたが、私はあっさりと身体を宙に投げ出していた ああ、死んだか。

「 掴まれっ! 」

イケメンが叫びながら手を此方に差し出してきた。恐らく、この手を掴めば私は助かるのだろう。

頭が良くて格好良くて、喧嘩が強くて人助けも出来てしまう。こいつは正真正銘の主人公だ。

だからだろうか、私は反射的にその手を弾いていた。

「っ!？ お前、何やって ー」

「お前になんか、助けて欲しくは無い」

そして私は数秒後、40メートル下の路上で凄惨な死体を曝す羽目になった。

## プロローグ（後書き）

御意見御感想などお待ちしております！

## 1「転生の器」

とある冒険者、アイラが前世の記憶、と言うものを自覚したきっかけはほんの些細なものだった。

「おい、大丈夫か？」

頭上から掛けられた声に反応する事が出来ない。それほどにアイラは混乱している。

「ちよっとお兄ちゃん！ どさくさに紛れて変な事しようとしてたでしょ！？」

「いや、してねぶへっ！？ おまつ、いきなりグーで殴るか普通！？」

地面にへたりこんでいたアイラがちらりと視線を向けると、殴り合い　　と言いか一方的な暴力だが　　をしていた男女が揃って此方へと窺うような視線を返してきた。そう、この二人は

「ティムレイト、アリシア…か」

男の方はティムレイト、ハーリア。そして女の方はティムレイトの妹のアリシア、ハーリア。アイラはこの二人と旅をしていたのだ

『アイラの記憶』によると、だが。

廃ビルから落下し、地面に叩き付けられた瞬間に意識が飛んだ薫は

気が付くと雲の上に居た。そして目の前には白い装束を身に纏った壮年の男性が豪華な椅子に腰掛け、此方を見下ろしていた。

「やはり、私は死んでしまったのか」

恐らく此処は天国で彼は神様なのだろうと薫は推測し、力無く呟いた。

「うむ、理解しているのならば早速本題に移らせてもらおう」

神は薫の返答を待たず、指をぱちん、と鳴らした。すると次の瞬間、何もなかった筈の空間にモニターが現れた。しかも、そのモニターは空中にぶかぶかと浮かんでいた。

「これは…」

モニターには様々な項目、そしてその右には『+4』や『-1』と言った数字がずらっと並んでいた。

「これはお前が生まれてから死ぬまでの間に行ってきた善行や悪行をリストアップし、その内容を点数化したものだ」

「それで、その点数に何か意味が？」

「来世での処遇が決まる。いや、決める事が出来る、と言った方が正しいか」

神の説明を聞いた薫はその内容を頭の中で考え、そして問い掛けた。

「つまり、前世の持ち点によっては来世の融通が効く…と言う事で

良いのか？」

「100点の回答だな」

どうやら正解らしい。

「それで、私の持ち点は何点ある？」

大して期待はしていないが、特に犯罪行為などに手を染めたことも無かったのである程度の点数はあるだろうと思っていた薫は次の瞬間、文字通り固まった。

「2点」

「は？」

「2点だ」

「2点、2点でお前：おかしいやろ」

思わず素になってしまい地元の方言で突っ込んでしまう薫を尻目に、神はもう一度指を鳴らした。するとモニターの表示が切り替わった。

「これが持ち点を消費する事によって選択できる項目だが」

「いやちよつと待て。いくら何でも持ち点が少なすぎるだろう。明らかに作為を感じるのだが」

説明を遮られた神は特に気分を害した様子もなく、薫の疑問に答えるべく話し始めた。

「本来ならばお前の持ち点は1002点あった。ちなみにこれだけあれば来世ではどの分野においても才覚を発揮出来ただろう……しかし、だ。お前」

自殺しただろう？ と神は首を傾げた。

「ち、がう…あれは、事故だ」

「いや、お前は助かる筈の命を自ら捨てた。それは許されぬ行為だ」

「違う！ 私は、死にたくなってなかった！」

薫は首を振り乱しながら叫んだ。

「では、何故あの時、救いの手を払い除けた？」

「それ、は…それは……」

言い淀む薫。神は何も言わず、ただ薫の言葉の続きを待っていた。

「……そう。私は、主人公になりたかったんだ」

「そんなものは創作物の中にしか居ない」

「それでも！ それでも……私は特別な何かが欲しかった。それがあれば私はあんな寂しい思いも、惨めな思いも、辛い思いもせずに済んだのに……そして、私は誰かにとっての主人公になれた筈なのに……」

支離滅裂だとは分かっているながらも、薫は自らの思いを吐き出した。

「ふむ、ならばこうしようか」

神が再び指をならすと、モニターの表示内容が最初に表示されていた内容に切り替わる。モニターの最下部、先程まで2点と表示されていた総合点の項目には10000000000000点と表示されていた。

「は…?」

薫は呆然としつつも、モニターに並ぶ0の数を数えてみる。

「1000億点……極端すぎるだろう」

「ただし、この点数で得た項目が効力を発揮するには条件がある」

「条件、とは」

薫が先を促す。

「条件とは、お前が来世で今の記憶を取り戻す事だ」

「どうやって?」

「とある行動を起こせば自動的に記憶が戻る様に細工してある……まあ、日常生活ではまずしない動きだが」

「それは無理な気がするんだが」

「主人公になるのだろうか？ これくらいの難題、越えてみる」

「……分かったよ」

薫が観念した風に呟くと、神は満足気に頷いた。

「うむ、では付加する能力の選択をしておおうか」

「……いやしかし、キーとなる動作が明らかにおかしいだろう」

宿屋のベッドの上でアイラは頭を抱えながら呟いた。記憶を呼び戻す動作がまさか『くしゃみをしながらバナナの皮で足を滑らせて尻餅を着く』だとは誰も思わないだろう。と言うか、最早それは動作ではなく事故だとアイラは神に突っ込みたかった。

「おい、お前本当にどうしたんだよ。大丈夫かマジで」

「ああ、うん。もう大丈夫だ」

ベッドの傍らから気遣わしげな声を掛けてくるティムレイトに愛想笑いを返しつつ、アイラは部屋の中を見回す。現代では考えられないような古めかしさだと思う一方、これがこの世界では当然のクオリティだとも思う。前世の自分（薫）と現世の自分（アイラ）の意識が混ざり合って、頭がずきずきと痛む。

そんなアイラの様子を見たティムレイトが少し呆れた様な表情を浮かべ、半ば無理矢理にアイラをベッドに押し倒し、布団を被せた。

「わぶ…っ！」

「良いから、今日はもう寝てろ。今日の分の依頼は俺とアリシアでやっつくから」

そしてアイラの返答を待たず、ティムレイトは部屋から出て行った。アリシアはすでにギルドに出向いていたので、部屋には布団を引っ掛けられて目を白黒させているアイラだけが残った。

「ティムめ…私よりも身長が低いくせに生意気な奴」

身長は低いものの、何だかんだで面倒見が良くて頼りが甲斐もある男、と言うのがアイラの中にあるティムレイトの記憶だ。ちなみにティム、と言うのは仲間内での彼の愛称だったりする。

「さて、これからどうしようか…」

ベッドの上で上半身だけを起こし、アイラは考える。前世と現世の記憶の齟齬はリアルタイムで収まりつつあるが、すでに『アイラ』が構成していた現在の人間関係をどうするかが問題である。現世の記憶は確かに自分自身のものなので今まで通り生きていく事も可能ではあるが、前世の記憶が確かならば、記憶を取り戻した自分は莫大な持ち点によってかなり強化されている筈だ。現在の様に、3人でつるんで掛け出し冒険者の様な真似をしなくとも好き勝手に生きていく事が可能だろう。

アイラを取るか、薫を取るか、悩み所である。

「まあ、取り敢えず現状を理解する為にも外に出るか」

つまる所、現実逃避である。

そう決めると、アイラは早々に部屋から飛び出し、宿を出た。それから少し歩いて町の表通りに出ると、其処は中々の賑わいを見せていた。通りのあちこちには露天商が様々な商品を並べて声を張り上げ、鎧やローブを身に纏った冒険者らしき集団は串に刺さった何かの肉を頬張りながら談笑し、小さな子供達が甲高い声を上げながら走り回っている。前世では過疎化の進みつつある住宅街に住んでいたアイラにとっては何もかもが眩しく映った。

「おう、アイラじゃねえか。今日はあの兄妹とは一緒じゃねえのかい？」

あちこちを見ながらふらふらと歩いていると、皮製の鎧に身を包み、背中には身の丈程もある槌を背負ったやたらと威つい男が声を掛けてきた。確か彼は

「ボルドーか。そっちこそ今日は一人なのか？」

『アイラ』の記憶を頼りに、なるべく平静を保って声を掛ける。『薫』はこういったタイプの手合いが居ると黙って道を引き返す程度には小心者だったので、現在も出来るだけ話を長引かせたりせず、早急にこの場を立ち去りたいと考えていた。

「おう、最近では依頼が立て込んでたからな。たまには休まねえと身体が駄目になっちまうって連中にどやされてよ……」  
「たたく、俺はまだまだ余裕なんだからよ、元気が有り余って仕方ねえぜ」

「まあ、元気だけが取り柄みたいな奴だからな、お前は」

つい『アイラ』の調子で軽口を叩いてしまい、頭の中で「何言ってるの私!？」と叫んでいたアイラだったが、ボルドーの方は特に気を悪くした様子も無く、豪快に笑うだけだった。

「じゃあ、私はちょっと用があるから。またな」

話を切り上げ、足早にその場を立ち去ろうとしたアイラだったが、ボルドーに腕を掴まれた。

「まあ待てよ、実はお前の耳に入れておきたい事が」

「触んな!」

生来の対人スキルの低さからか、アイラは反射的に叫びながら掴まれた腕を乱暴に振り払った。そして、ボルドーはノーバウンドで10メートル以上吹き飛び、果物屋の屋台に突っ込んだ。

「え」

賑やかだった表通りが今までとは違った意味合いで騒がしくなる。屋台に突っ込んだボルドーはぴくりとも動かない。

「っ!」

気付けば、アイラは走り出していた。そして走り出してから気付く、自分の身体能力が異常なまでに強化されている事に。

「どうしようどうしようどうしよう……もう駄目だ。何処にも居られない……!」

うわ言の様に眩きながらアイラはとてつもない速度で走る。壁があれば飛び越え、人混みを通る時は驚異的な身体能力を活かしてすり抜けた。

そうして、アイラは気が付けば町から随分と離れた所まで来ていた。振り返ると、町はもう米粒大の大きさにしか見えなくなっている。それだけ走ったのにも関わらず、息切れ所か汗一つかいていない自分の身体能力に、アイラは力無く笑うだけだった。

「これでは、まるで化物だな」

化物、という自虐的なフレーズにまたアイラはまた力無く笑い、近くにあった木の下に腰を下ろした。どうやら森の入り口辺りまで来てしまっていたらしい。

「ん……？」

獣の気配がする、とアイラの中の何かが告げた。この感覚もポイントによって付与された能力なのだろうが、今のアイラにはそんな事はどうでも良かった。

「お前、私を殺したいのか？」

アイラは立ち上がり、森の入口に向けて声を掛ける。しかし返答は無かった。そしてその数秒後、全長2メートル程の大きさの、頭から角を生やした熊の様な獣が四つん這いで現れた。

「ホーンベア、か…」

ホーンベアが唸り声を上げながら飛び掛かってきたが、アイラはそ

れを感情の籠っていない眼で見つめるだけだった。

そして、アイラの華奢な肩にホーンベアが噛み付いた。

「何だ、お前」

アイラの底冷えするような囁きを聞いて、ホーンベアの瞳が言い様の無い恐怖で染まる。

「私を殺す事も出来ないのか」

次の瞬間、ホーンベアの胴体に大きな風穴が空いた。

力無く崩れ落ちたホーンベア。そして、先程までホーンベアが噛み付いていた筈のアイラの肩には一切傷が付いていなかった。

「……は」

返り血にまみれた身体を見下ろしながらアイラは思う。これなら、大人しく前世で生き延びていた方がましだったのでは、と。

そんな事を考えながら立ち尽くしていたアイラだったが、再び森の方から何かが近付いて来る気配を察知し、一瞬身構え掛けたが、止めた。ホーンベアのような魔物ですら傷一つ付けられなかったのだ。さしたる脅威にはなりえないだろう。

「ぬおおおおっ！ やつと追い付いたぜえ！ 晩飯いいいいい！」

「は？」

アイラの眼が点になった。何故なら、森から出てきたのは半裸かつ汗だくで、やたらと暑苦しい顔付きの男だったからだ。折角のシリアスモードも台無しである。

「むっ！ お前か！ 俺の晩飯を横取りしたのはっ！？」

「いや、だから」

「問答無用！ 男なら拳で答えて見せろっ！」

「私、男じゃな」

「何故なら、その方がカッコいいからだっ！」

駄目だこの男。まるで話を聞いちゃいない。

取り敢えず死なない程度に吹っ飛ばしてしまおう、とアイラは決心したのだった。

## 2「成長の鍵」

「ぬおおおおおりやああああああ！」

半裸男が暑苦しい声を上げながら突っ込んでくる。直線的な動きではあったが、半裸男の動きは出鱈目なまでに速く、アイラは反応する事も出来ず、半裸男の飛び蹴りを顔面で受け止め、盛大に吹き飛んだ。

「ぬ……？」

蹴りを当てた筈の半裸男だったが、アイラへと蹴りを放った方の脚に視線を向けると不思議そうに首を傾げた。

「……人の話を聞け。この変態め」

吹き飛んで地面を転がりはしたものの、アイラは何事も無かったかの様に起き上がると首を傾げたままの半裸男に向けて石を投げ付けた。

アイラの常軌を逸した腕力で放たれた石は凄まじい速度だったが、半裸男はそれを身を屈めてかわし、そのまま前傾姿勢で暑苦しい叫び声をあげながら突っ込んできた。

「何度も喰らうと思うなよ」

先程は反応も出来なかった筈の半裸男の動きが、今のアイラにはきつちりと見えていた。半裸男が放った右の拳を正面から右手で掴んで受け止めると、アイラは上空へと力任せに放り投げた。

「う、おおおおおお！？」

上空で喚く半裸男に向けてアイラは再び石を投げ付けた。流石に上空では避ける事は叶わないだろうとアイラは考えていたが、半裸男の動きは予想の斜め上をいった。

「そんなカツコ悪い攻撃が効くかああああ！」

意味不明な叫び声を上げながら半裸男は空中で体勢を整え、飛んできた石を蹴り返してきた。無茶苦茶な反撃にアイラは僅かに眼を見開きながらもそれを回避したが、その直後に放たれた半裸男の落下のエネルギーを乗せた蹴りをまともに受けて地面に叩き付けられた。

「つく…！」

痛みは無かったが、衝撃にアイラの脳が揺れた。意識が混濁して起き上がる事が出来ないアイラを見下ろし、半裸男は腕を組み豪快に笑った。

「ふははははは！最後に勝つのはカツコいい奴だ！」

お前は別にカツコよくないから、と突っ込みたかったアイラだったが、それも叶わず意識を手放した。

何だか美味しそうな匂いがして、アイラは眼を覚ました。

「おお、起きたか！」

「う、む…？」

アイラが少しだけ痛む頭を擦りながら上半身を起こすと、半裸男は二カッ！ という擬音がつきそうな笑みを浮かべながら木の枝に突き刺さった肉の塊を差し出してきた。

「食え！ 取り敢えず食え！ 話はそれからだ！」

色々と言いたい事があつたアイラではあつたが、実際腹が減つていたので黙って肉の塊を受け取り、かぶり付いた。うん、美味しい。

「ホーンベアの肉はジューシーで美味しいな、うん！」

「わざとか？ わざと言っているのか？」

何の肉か分かつてしまったアイラはそれ以上食べる事が出来なかった。

そして、アイラの食べかけも含め、ホーンベアの肉を全て平らげた半裸男は満足気に腹を擦りながら口を開いた。

「それで、お前。何でそんな状態でこんな所まで来てたんだ？」

そんな状態、と言われ、アイラは改めて自分の状態を確認した。綿の様な生地で作られた黒いズボンに白いシャツ、それから腰には財布代わりの皮袋を下げている。ちなみに武器や防具の類は一切身に付けていない。確かに、こんな装備で町から遠く離れた森まで来たら怪しまれても仕方無いだろう。

「それは…」

「それに、だ。ホーンベアを徒手空拳で仕留めるとは。人間業じゃないぞ」

俺はもつと強いけどな！ と無駄なアピールをする半裸男に対し、アイラはどう説明すれば良いのか考える。転生の事。出鱈目なまでに強化された身体の事。そして、自分がその力を御しきれず、人を傷付けてしまった事。何処まで説明するべきか。

「別に俺に話す必要は無い。だが、話す事でどうにかなる事だってあるんだぜ？」

考えていることが顔に出ていたのだろうか、半裸男は妙に清々しい表情で言った。それを見て、アイラは自分の事情について話す事を決めた。

「実は…だな。とある事情があつて、私は後天的な要因によって身体能力を始めとした様々な能力が飛躍的に上昇してしまったのだ」

「何い！？」

アイラの説明を聞いて、半裸男が勢い良く立ち上がった。やはり突拍子の無い話過ぎたか、と半ば諦めにも似た感情を抱き掛けていたアイラだったが、次いで放たれた言葉によってそれはあっさりと払拭された。

「何だその最高にカッコいい設定は！？ 羨ましすぎるぞお！」

ああ、馬鹿なんだ。アイラは確信した。

「それで、だな。あまりにも力が強過ぎて私は居場所を失って…いや、壊してしまったのだ」

半裸男はゆっくりと座り、黙ってアイラの話聞き続けた。

「私自身にも力の底が分からないんだ。こんな状態では、私は普通に生きていく事すら出来ない…私はどうすれば良いのだろうか」

「修行だ！」

即答だった。

「まあ、一理あるだろうが…」

腕を組み、今一つ納得が行かないといった様子のアイラに、半裸男は唾を飛ばしながら説明を始めた。

「いいか謎の美少女よっ！」

「誰だ、謎の美少女とは」

「お前の様なタイプの人間は滅多に居ないが、それでも修行が有効だと言える理由を教えてやろう！」

どうやらアイラの突っ込みは無視の方向らしい。

「修行とは単純に個人の能力を高めるだけではなくっ！ 肉体的にも！ 精神的にも！ 己を見詰め直し！ そして総合的な意味合いでもって自分自身を理解する事も指すの、だあああああああ

！」

最後に勢い良く立ち上がり、無駄に洗練された無駄の無い無駄なポーズを決めた半裸男に、アイラは暫く考えた後、呟いた。

「確かに」

どうやらアイラも比較的馬鹿な部類の様だ。

「とは言え、私は下手をすれば犯罪者として手配されているかもしれない。そんな悠長な事をしていられるかどうか…」

ボルドーは無事だろうか。まさか死んではないだろうか、あれでは恐らく大怪我は免れないだろう。アイラがそんな事を考えていると、半裸男にデコピンをされた。

「痛っ！？」

ちなみにアイラには一切ダメージは無く、デコピンをした方の半裸男が指を押さえて地面を転がる羽目になっていた。

「…お前は何がしたいんだ？」

「今はネガティブな考えは捨てろって事だ！ 修行のあてはあるから、お前は自分が成長する事だけ考えてろ！」

そう言つと、半裸男は両手を地面にあてがい、今までとは異なる調子で言葉を紡いだ。

「開け。そして繋げ」

直後、眩い光を放つ直径3メートル程の円陣　恐らく魔法陣だろう  
が地面に刻まれた。

「これ、は…？」

「所謂、転移魔法の一環だな。特定の場所にしか繋がらない代わりに発動に掛かるコストや時間が少なくて済むからな！」

事も無げに説明する半裸男に、アイラは眼を丸くした。

「お前、魔法使えたのか？」

「はっはっは！　いくらなんでも魔族にその質問は無いだろう？」

「えっ」

「えっ」

両者の間に沈黙が流れる。

「さて！　早速修行の舞台へ行くか！」

数秒前のやり取りを無かった事にしたいらしい半裸男に、アイラは空気を讀んだのか無言で頷いた。

「ちなみに、何処で修行をするんだ？」

何と無くといった風にアイラが問い掛けると、半裸男は即答した。

「魔界だ！」

……。

「えっ」

「えっ」

次の瞬間、二人は魔界へと転移した。

## 2「成長の鍵」(後書き)

御意見御感想、お待ちしております！

### 3 「修行の成果」(前書き)

その内世界観やキャラ紹介の項を設けますね。

### 3「修行の成果」

アイラが修行と称して行方不明になってから5年が経ち、ティムレイトは23歳、アリシアは18歳になった。

「はい、討伐目標の証明部位の確認が取れました！ 依頼達成ですね、お疲れさまです！」

愛らしい顔立ちの受付から報酬金を受け取ったティムレイトは、ギルドの飲食スペースで一足先に食事を始めていたアリシアが居るテーブル席の対面に腰掛けた。

「報酬は全部ギルドの金庫に入れといたぞ」

「うん。まだまだ手持ちもあるからそれで大丈夫だよ」

そしてティムレイトも適当に料理を頼み、しばらく食事に没頭した。

「ねえお兄ちゃん」

食事も終わりに差し掛かった頃、アリシアが口を開いた

「ん？」

「最近ね、こんな噂があるんだけど知ってる？」

ここ最近、隣の国でギルドから要注意指定されている魔物を片っ端から徒手空拳で殺して回っている冒険者がいるらしい。そしてその冒険者は年端も行かない黒髪黒目の少女らしい。

「それだけじゃ何とも言えないな　でも、気になる情報でもある」

「でしょ？」

ハリア兄妹がアイラと別れた日、アイラに吹っ飛ばされたボルドーから聞いた話ではアイラは普段からは想像も出来ない程の怪力を発揮していたらしい。当時のアイラの戦闘スタイルは力押しというよりは身軽さをいかした技巧派であり、ボルドーの様な巨漢を腕力だけで投げ飛ばすことは不可能だろう。と言うかそんな事はティムレイトにも不可能だ。

「やっぱり… 5年前のあの日、アイラの身に何か起きたんだろうな」

「それが何かは分からないけど、その事があってアイラちゃんは姿を消した」

「んじゃ、いつちょ行ってみるか？　キルドラント王国まで」

「うん！」

そんなとある兄弟が探している張本人であるアイラは、キルドラント王国領内のある森の中で魔物と対峙していた。

一対の翼を持つ全長約10メートルの巨大な身体、微かに光沢を放つ紅い鱗、鋭い牙が覗く口からは時折炎が噴き出している　ドラゴンである。

森、とは言っても既に周囲の木々はドラゴンが放った火炎の息によって焼き払われており、巨大な魔物と人間が対峙するには余りにも不利な状況だと言える。しかし、アイラは傷一つ負ってはおらず、相対するドラゴンは息も絶え絶えといった風である。

「さて、そろそろ終わらせるか」

そんなアイラの言葉の意味を理解したのか、ドラゴンが咆哮をあげながら突っ込んできた。大型のトラックですら容易くスクラップにしていまいかねない威力を秘めた突進に対して、アイラが取った行動は至ってシンプルだった。

「……っ、せ！」

微妙に気の抜けた掛け声と共にアイラが飛び上がり、凄まじい速度で突っ込んできたドラゴンの鼻っ面にドロップキックを叩き込むと、まともに蹴りを受けたドラゴンは仰け反った体勢で5メートル程後ろに吹き飛んだ。

「止め、っと」

間髪入れずドラゴンとの距離を詰めたアイラはその無防備な腹に向けて右の拳を振り下ろした。ドラゴンは吐血しながらしばらく痙攣していたが、やがて動かなくなった。

「ええ、と…これは、レッドドラゴンか」

アイラがドラゴンの死体に眼を向けて意識を集中させると、頭の中にドラゴンの情報が浮かんた。これも転生の際に得た能力の一つである。

「この力試しもそろそろ止めておくか。ギルドに眼を付けられてしまっているしな」

アイラの修行期間は実は1年だったのだが、魔界と此方では時間の流れ方が違うらしく、気が付けば此方では5年も経過していた。当然、5年も所在不明で一切ギルドに顔を出さなかったアイラのギルドのライセンスは失効しており、再びギルドランクFからのやり直しとなってしまったのだ。ギルドランクはFからSSSまであり、依頼の実績や特定の試験の可否などによって上下する。ちなみに以前のアイラのランクはDだった。

魔界での修行で転生によって付与された能力の全てを把握したアイラは腕試しと称してギルドにあった高難度の依頼を受注しようとしたのだが、自分のランクと依頼のランクが違い過ぎて許可が下りなかった。なのでアイラは依頼の情報を頼りに、依頼とは関係無く個人的に魔物狩りを始めたのだった。

ギルドで依頼を受けずに魔物を討伐しても報酬が得られないだけで別に違法ではないのだが、意図的にギルドが仲介している依頼の討伐目標を立て続けに狩り続けているアイラに対して不満を持った一部の高ランクの冒険者達がギルドに対して訴え掛けた為、ギルドから度々注意を受けているのだ。

「っ、だあああああああ！　またお前かよ！」

ドラゴンの死体に乗し、あれこれと考え込んでいたアイラの耳に心底悔しそうな叫び声が届いた。アイラがちらりと視線を向けると、ドラゴンの死体の足元辺りで地団駄を踏んでいる30代半ば程の男が居た。彼こそがギルドに対して不満を訴え掛けている冒険者の一

人、名前は確か

「そう、アカハナだったか」

「違いよ！ アカシアだっつの！」

ちょっとした呟きに対しても律儀に突っ込みを入れてくるアカシアを見て、アイラは満足気に頷いた。実はこのやり取りも4回目なのだが、それでも飽きずに反応をしてくれる突っ込みの鏡の様な男である、このアカシアという男は。

「アカシアさん、もう帰っても良いですか？」

「ってか、もう帰りますんで。お疲れっしたー」

「って、おおーい！ お前らもうちょい空気読めよ！」

パーティーを組んでいるらしい、双子の女性が町へと向けて歩き始めたのを見て、アカシアが慌てて追い掛けて通せんぼをした。

「えー？ だってもう其処の人がやっちゃってるじゃないっすか」

「ってか、このやり取り何回目なんすか？ こんな事はつかしてたらマジで金の無駄なんで止めて貰えます？」

「ええー！ 俺か？ 俺が悪い流れなのかこれ…？」

何だかアカシアが可哀想になってきたので、アイラはドラゴンの身体から飛び降りて声を掛けた。

「ああ、毎度毎度悪いな。こっちは力試しがしたかっただけだから、コイツの討伐証明部位ならそっちで持って帰って貰って構わないぞ」

「『あ、マジすか？』」

三人の声がハモった。何だかんだで仲が良いらしい。

「まあ、今度からはちゃんとギルドで依頼を受けていくつもりだから今回のような事はもう無いぞ。安心してくれ」

アイラの言葉を聞いて、アカシアは不思議そうな表情を浮かべた。

「なあ、何で今までギルドで依頼を受けなかったんだ？ お前程の実力ならすぐにランクを上げられるだろ？」

アカシアの問い掛けに、アイラは不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「どうせランクを上げるなら派手にやろうと思ってな…今度王都で開かれる闘技大会に出ようと思っている」

「ほお」

アイラの言葉を聞いて、アカシアの瞳に今までとは違う色が宿った。

「面白えじゃねえか。俺も参加するつもりだ…ま、そんなときゃあ覚悟しろよな？」

このアカシアという男、突っ込みばかりが目立つが実はギルドランクはAと何気に実力者である。

「ああ、楽しみにしている　で、この状況、どうする？」

アイラが周囲に眼を向けながら問い掛けた。アカシアも釣られて周囲に眼を向け、眼を見開いた。

「ま、マジかこれ…」

ドラゴンが死んだ事を察したのだろうか、縄張りをドラゴンに奪われていた大量の魔物達がアイラ達を取り囲んでいた。

「アカシアさん、頑張ってくださいね！」

「お前らも戦えよ！？」

「おい、漫才は良いからさっさと蹴散らすぞ」

そう良いながらアイラは魔物の群の一角に突っ込んで行った。

「まったく、お前が居るとロクな事が起こりやしねえなあ本当によ！」

満更でも無さそうな笑みを浮かべ、アカシアは双子を従えてアイラとは反対方向の群へと突っ込んで行った。

そして数時間後、4人揃って返り血まみれで町に戻って周りから顰蹙を買う事になるのだが、それはまた別のお話である。

### 3 「修行の成果」(後書き)

散々喋らせておいてアレですが、アカシアさんは再登場無しです。  
ゴメンねアカシアさん！

#### 4「試練の道」

キルドラント王国の首都、マリーリア。

其処で毎年開かれている闘技大会には国内外を問わず多くの冒険者、武芸者などが参加している。そんな闘技大会にアイラが参加しようとしている理由は莫大な優勝賞金でもより強い強者と戦いたいからでもなく、大会成績に応じてギルドのランクが上がるからである。実際にどれ位ランクが上がるかは毎年若干変わるのだが、闘技大会の優勝者ともなれば確実にランクSSには届くと言われている。

その闘技大会の日までの時間を要注意指定された凶悪な魔物と戦う事で潰していたアイラだったが、そろそろマリーリアを目指す事にした。

「さて、準備はこんなものか」

最低限に纏めた荷物を背負い、アイラは魔物狩りの間に拠点としていた町を出た。移動手段は徒歩。ちなみにアイラが居る町からマリーリアまでは馬車で10日程掛かる。そして、闘技大会の参加受付の期日は3日後である。

アカシアには馬車で一緒に行こうと誘われたのだが、アイラは断った。何故なら、馬車よりも自分で走った方が遥かに速いからである。

簡単な柔軟を済ませてから、アイラは駆け出す。そして、走り出して数秒でアイラは時速60キロ程まで加速した。しかし、これでもアイラはかなり余力を残している。アイラは修行の過程で、自身の

異常なまでに強化された身体能力をかなり細かな精度で制御する術を身に付けた。ちなみに現在アイラは全力の5パーセント程の力で走っている。

アイラは更に力を10パーセントまで解放する。現時点でアイラの速度は時速にして160キロを越えていた。

「ふむ、これなら明日の夕方には着くか」

たまにすれ違う馬車や徒歩で街道を進んでいる冒険者が仰天して引っくり返っている事にも気付かず、アイラは呑気な調子で呟いた。

それから数時間、休む事無く走り続けていたアイラだったが、不意にその歩み　歩みと言えるレベルの速度ではなかったが　を止めた。

立ち止まったアイラは眼を凝らして進行方向を見た。どうやら馬車が盗賊か何かに囲まれて立ち往生しているらしい。別に素通りしても良かったのだが、とある男の「困ってる奴を見捨てるなんて、カッコ悪いにも程があるぜえええ！」という台詞が脳内再生されたので、疲れた風に溜め息を一つ吐いてから馬車の方へと近付いていた。

「あー、もしもし？」

馬車を取り囲んでいた盗賊らしき男達へとアイラが投げ槍に声を掛けると、その内の一人が抜き身の剣を片手に近付いてきた。

「ああ、何か用か？」

「うむ。ひょっとしたらお前達が其処の馬車を襲っているんじゃないかと思つてな。もしそうならお前らを全員始末するつもりなんだが…」

アイラの言葉を聞いて一瞬呆けた様な顔をした盗賊だったが、次の瞬間には大爆笑していた。

「だつはつはつは！ そりゃ、俺達あ盗賊だけど？ だつたら何だあ？ お前みてえな餓鬼が何を」

アイラの一番近くで笑っていた盗賊が地面に叩き付けられた。理由は勿論、アイラに拳骨を喰らったからである。

「悪く思ふなよ…この国では盗賊行為は例外無く死罪なんだからな」  
言葉を失い、呆然とした様子でアイラと地面に倒れ伏した男を見ていた盗賊達だったが、その一人が短く悲鳴を上げた。

「ひ……し、しし死んでるう…！？」

完全に恐慌状態に陥ってしまった男の言葉を聞いて、盗賊達は地面に倒れ伏してしる男へと視線を向け、大きく眼を見開いた。先程拳骨を喰らって地面に叩き付けられた男の登頂部は完全に陥没しており、其処からは止めどなく血が流れていたのだ。

「な…化け物か、こいつ…」

「と、取り敢えず囲めえ！」

顔に言い様の無い恐怖を滲ませつつも、盗賊達は割と統率の取れた動きでアイラを包囲しようと動き始めたが、それより早く、アイラは盗賊達に指示を出している男　恐らく頭領だろう　に肉薄し、素早く右手を振り抜いた。

「が　！？」

頭領らしき男の首が宙を舞う。その事に他の盗賊達が気付くよりも速く、アイラは先程と同様に手刀で首の無い死体を量産していった。

「ふむ、こんな所か」

馬車を囲っていた14人の盗賊を全て片付けたアイラは、まるで人の気配が感じられない馬車の方へと近付いていった。

「おい、気配を殺したって無駄だぞ」

「あ、やっぱりバレてた？」

アイラが呆れた風に声を掛けると、馬車の下から男が這い出てきた。

「いやー、いきなり盗賊達に絡まれちゃってどーしようかと思ったんだけどさ？　助かったよー！　君に盗賊達の注意が向いてる間に逃げようと思ったんだけど逃げそびれちゃうし本当にどうなる事かと思ったよもー」

「あ、そう」

見るからに軽薄そうな男がべらべらと喋るのを聞いて、アイラは無

感情な声で適当に相槌を打った。どうやら相性が悪いらしい。

じゃあ、と言ってその場を後にしようとしたアイラだったが、軽薄男に腕を掴まれた。

「何だ？」

「いやさー？ 助けてくれたついでにもういつこだけ助けて欲しい事があるんだけど」

「断る」

「まーまーまーまー！」

何なのこいつ。ウザいんですけど。

取り合う必要は無いと判断し、アイラはそのまま歩き始めた。しかし、アイラの腕を掴んでいた軽薄男は引き摺られながらもその手を離さない。

「実はね、マリーリアの闘技大会に向かつてる最中だったんだけどさー、盗賊のせいで馬に逃げられちゃって足がないのよー」

「見ての通り、私は徒歩だ。代わりの馬車など用意出来ないぞ」

歩みを止め、地面に転がったまま笑っている軽薄男に対して説明をしたアイラだったが、軽薄男はほんの少しだけ笑みを深め、こう答えた。

「だって君、闘技大会でるんでしょー？ それなのにこんな時期に

此処に居るって事はさー…何かあるんでしょ？ 移動手段」

「何故、私が大会に出ると思う？」

「戦士の勘、かなー？」

アイラの問い掛けにへらへらと笑いながら答える軽薄男だったが、先程とは違い、瞳の奥に微かな光を宿していた。この男は間違いなく実力者だと、アイラの勘が告げた。

「……報酬は？」

「金貨3枚でどうかなー？」

「分かった。運んでやる」

観念した風にアイラが頷くと、軽薄男は素早く立ち上がり、アイラの両手をがっしりと握った。

「ありがとー！ あ、そうそう！ 俺の名前はオーキニー、マイド  
「オーキニーっていうの！ よろしくねー」

いや、偽名だろそれ、と突っ込みたかったアイラだが、また面倒な返しが来るのだらうと思ったので何も突っ込まず、「私はアイラだ」とだけ言った。

「そんじゃー、アイラちゃん、よろしくねー。で、どーやってマリ  
ーリアまで行くの？ 転移魔法？ それとも幻獣召喚とか」

「徒歩だが？」

「……またまたー」

アイラの返答を聞いて、冗談ぼく手をひらひらと振ってみせたオーキニーだったが、アイラの顔が嘘を吐いていない顔だと気付いたのか、やや表情を固くしながら再び問い掛けてきた。

「マジ、で？」

「マジだが？」

笑顔のまま硬直しているオーキニーを無理矢理肩に担ぐと、アイラはそのまま走り出した　　時速にして200キロ程の速度で。

「ちょちょちょちょ　　！？」

「黙れ、舌を噛むぞ」

困惑しきった表情で声にならない声をあげるオーキニーに一言告げ、アイラは更に速度を上げる。

「ちょ　　あふ」

どうやらオーキニーは気絶したらしい。アイラは好都合だと考え、肩にオーキニーを抱えたまま走り続けた。首都マリーリアまではおよそ800キロ程なので、予想通り明日の昼には到着するだろう。

結局、オーキニーは夜営の準備の為に止まるまで一回も眼を覚ます事は無かった。

#### 4「試練の道」(後書き)

御意見ご感想、御待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3922s/>

---

セカンドライフは異世界で【改訂版】

2011年5月13日13時39分発行